



「満月を待って」上演終了後記念写真

【はじめに】

私は「アートは美術館や音楽ホール、劇場だけで味わうものではなく、日々の暮らしの隣りにも必ずあるもの」という理念を持っています。これは、アートを身近に感じ親しむことで生きることや日々の生活が豊かになるという実体験から生まれたものです。

そのことから、様々なアーティストらと共に、倉庫やカフェ、美容院、地域交流サロンなど、そこで暮らしている人たちを巻き込みながら今日まで多彩な取り組みを行ってきました。

そして昨年は貴財団の助成を受け初めての香川公演が実現しました。助成により新しい取り組みにチャレンジすることができました。

観劇料を通常より低く設定できたこともあって、全4回の公演は全て満席でした。様々な取り組みにより、公演後には「まるで自分の人生のお話のように感じた」「演劇の見方が変わった」などの感想や、このような機会をぜひまた作ってほしいという声を多数いただき、大きな成功を収めることができました。

この成功を受け、今年も自分たちが独立し活動を継続するため、地域や地元の方々との繋がりを持ち共に場を育む環境づくりを目指しています。

以下に今回の取り組みについてご報告いたします。

【上演作品について】

【タイトル】 小倉あんこ×嶋尾明奈 香川公演 2023 『満月を待って』

【あらすじ】 くたくたに疲れ切ってバスに飛び乗ったシングルマザーの千夏。
誰も来ない海辺の小さなバス停に降り立った彼女を待っていたのは
あの昭和の大スターだった！
旅立ったあの人の想いがそっとあなたに届く、ひと夏の応援ファンタジー。

【脚本】	井上志保	【記録】	矢野直美
【演出】	嶋尾明奈	【制作】	武村千亜紀 武村彰大
【出演】	嶋尾明奈 小倉あんこ		青木若菜 横山桂子
【演奏】	南口恵里		岩佐玲子
【照明音響】	山内貴志	【協力】	まなべななこ 廣瀬修平
【映像撮影】	鉢峯輝敏		秦元樹 劇団はぢめました。
【振付】	石川美菜子		藤澤翼 有限会社零夢
【衣装】	加藤こずえ		古木里庫

【後援】 三豊市/三豊市教育委員会/FM 香川/CMS ケーブルメディア四国/KBN 株式会社
TSC テレビせとうち/OENBUTAI 他

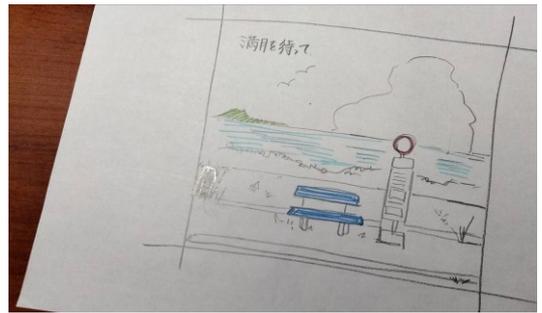
【取り組み】

- 1) 県・市・各種メディア・教育委員会等に後援の申請を行い、広報に努める。
- 2) 地元の店舗や企業を訪問し、活動の説明とチラシ配布を依頼することで、活動や演劇への理解と関心を深める。なおチラシには地元の風景を起用し訴求力を高める。
- 3) 演劇への理解と関心を深めるため、リハーサルを公開し、創作過程やスタッフワーク、雰囲気を感じてもらおう。また限定ではあるが招待枠を設け、観劇の機会を拡げる。
- 3) プロの脚本家に、地元を素材としたテーマや背景を盛り込んだ脚本の創作を依頼する。また、地元出身でプロとして活動している役者を起用し、見応えのある作品づくりを目指す。
- 5) 開演前に来場者に作品のテーマに沿った質問紙を渡し、その答えを劇中に取り入れる「観客参加型」とする。臨場感や親近感を演出することで誰もが文化芸術を楽しめる場になることを目指す。
- 6) 前回公演では、遠方であったり止むを得ない事情により観劇が叶わない方々から、映像配信を強く望まれる声を多数いただいた。今回は舞台を撮影・映像化し配信することでその声に応えると同時に、取組を他自治体にもアピールすることを目指す。

【地域とつながる】

<上演内容に沿う地元の風景を起用する>

脚本を手掛けてくださった井上さんから、作品の舞台は「海が見えるバス停」とお聞きして、イメージ通りの場所を探して地元の三豊市仁尾町や詫間町、荘内半島に通い、ここを見つけました。地元の方には「自分がいつも見ている風景がこうやってチラシになると違って見えて、あらためて見直すことができた」と喜んでいただきました。



画像候補の写真



完成したチラシ

<リハーサルの公開>

どうすれば子どもたちが気軽に演劇に触れ興味や関心を持ってもらえるか、演者とスタッフで話し合い、リハーサルを公開して創作過程やスタッフワーク、雰囲気を経験してもらうようにしました。さらに招待枠も設けました。また、三豊市教育委員会の後援をいただき、三豊市の小中学校に右のチラシを配布していただきました。残念ながら子どもたちの反応は薄かったのですが、見学に来てくださった大人の方が喜んでくださり、演劇は地方では珍しいジャンルなのだ改めて実感しました。



<https://ankoakina.oenb.work/>



<地元の店舗や企業への働きかけ>

活動に興味関心を持ってもらえるように、上演会場がある古木里庫さん周辺の店舗や企業を一軒一軒訪ねました。

上演の目的、内容などをお伝えすると、皆さんとてもあたたかく話を聞いてくださって、チラシも快く置いてくださりました。

当日、チラシを置いてくださった店舗の方や、お店でチラシを見て来ましたと言うお客様がいて、とても感激しました。



【観客とつながる】

開演前、お客様に予め答えて頂いたものを回収し、劇中に取り入れる。

臨場感や親近感を通常の舞台観劇以上に感じてもらうために、今回取り組んだのがお客様の言葉を劇中に取り入れることでした。

質問① 「適齢期」と聞いてあなたが思うものをひとつ教えてください。

またその適齢期は何歳から何歳だと思いますか？

質問② あなたが、もし「人の目」を気にするしたら、どんなことですか？

またそれは誰の目を気にしてのことですか？



お客様は、

「どこでこの自分が書いた言葉が使われるのかとても興味深かった」「なるほどそうなるのかと感心した」など、上演後に行ったアフタートークで自分が思ったことをシェアして下さり、対話をする・観客参加型の演劇としては成功だったと思いました。

【時代とつながる】

今回の作品には、昭和を代表する香川県出身の大スターが登場しました。そのため、本人の生涯やファッションも調べ、髪形やメイクはもちろん、衣装にもこだわり、晩年の大スターをイメージしたものとなりました。

また主人公の心情や田舎の穏やかな空気感を出すために、小道具や大道具もシンプルにしつつこだわりました。

そして会場が別世界に感じられるように、開場からずっと波の音を流す演出をしました。

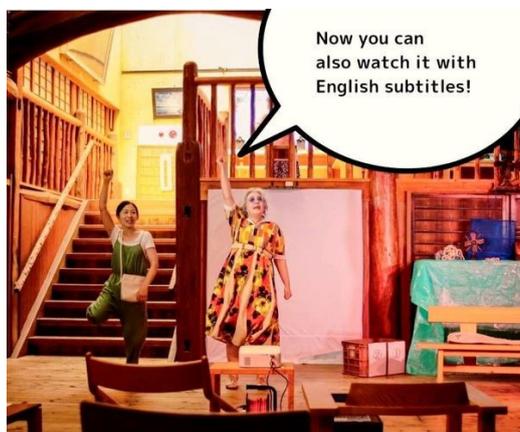


細部にこだわった小道具 大道具



衣装づくり

【空間を越えてつながる】



前回の公演では、遠方のためとか止むを得ない事情により観劇が叶わないという方々から、映像配信を望まれる声を多数いただきました。

そこで今回は舞台を撮影・映像化して配信することとしました。また、配信の際には英語字幕を付けて、海外の方でも楽しめるように工夫しました。

撮影、編集はとても大変でしたが、配信映像を購入してくださった方からはとても好評で、取り組んで良かったと思いました。

【脚本】

脚本家、井上さんの作品への思い

私は「～にもかかわらず」という言葉が好きです。
ある状況にいる人間が「～にもかかわらず」するその行動、
その「矛盾したやる気」,そこにドラマを感じます。

この作品は、「やりたいことを全部全力でやるなんて無理だ」とわかっていても、あきらめきれずに向かっていく,そんな一人の女性のある一日の物語です。

この「矛盾したやる気」に満ち満ちている主人公は、今回演じる小倉あんこさんと嶋尾明奈さんお二人がモデルです。お二人へのラブレターのような気持ちも込めて書きました。



脚本家：井上志保(いのうえ しほ)

岐阜県高山市出身。劇作家
カナダ・オンタリオ州立カールトン大学(社会学)卒業。
社会福祉士。
18年間宮崎で暮らし、戯曲、短歌を学ぶ。
短編を中心に戯曲創作に取り組む。愛媛県松山市在住。

【キャスト】

千夏：嶋尾明奈 (しまお あきな) 香川出身東京都在住

カレー女優。クリエイティブディレクター。
大学入学時に、同学演劇サークル「神戸大学はちの巣座」
に入部。演技の他スッタフワークも学ぶ。上京し劇団山の
手事情社で研修生として参加。修了後は芸能事務所に所属し
映像の現場と、年に1~2本の舞台に立ち続けた。
「たのしいくわだて」主宰。



シズ子：小倉あんこ（おぐら あんこ）愛媛



「やってみなくちゃわからない！」をモットーに30歳から演劇の世界へ飛び込む。脚本芝居だけでなく即興芝居など、アンテナが反応したところに身を投じ知識と技術を吸収。

現在は即興一人芝居を地元のカフェや食堂で開催して積極的に活動中。媛茶屋プラス labo 代表。



ヴァイオリン：南口 恵里（みなみぐち えり）岡山



劇中に即興でヴァイオリン生演奏。

3歳よりクラシックバイオリンを始める。高知大学入学をきっかけにギターとドラムでバンド活動始める。ヨーロッパツアーや台湾ツアー、インドネシアの伝統文化である紙人形劇の音楽担当など、文化・芸術の分野で幅広く活動中。現在、ミュージシャンとしても数々のオファーを受け、本職の左官職人としてもキャリアを積む。

空間に広がるヴァイオリンの音色が作品の余韻をたっぷりと味わわせてくれた。



【アフタートーク】

上演をして終わりではなく、終演後に出演者と観客とで自由に感じたことを話し合い、交流しました。それぞれの思いを語り合うことで作品の理解を深め、演劇の見方や楽しみ方を語り合いました。



アートを深める場を育む

ほとんどのお客様が終演後も会場に残ってアフタートークにご参加くださいました。そしてほとんどの方がこのような演劇は初体験という方ばかりでした。

皆さんの言葉や思いに触れ、これからも引き続き演劇に触れる機会を積極的につくろうと心に誓いました。

【成果】

今回、お客様からは「こんな所で演劇が観られるなんて思わなかった」「思っていたものより本格的で、見応えがあった」など、とても励みになる感想をいただき、次回への強い意欲につながりました。

ひとりでやれることは限られています。でも勇気をだして「助けて欲しい」と声にすれば、意外とたくさんの方が助けてくれることがわかりました。そこからより多くのアイデアが生まれ、人とのつながりが生まれることも体感できました。どれも素晴らしい体験でした。

自分たちが好きなジャンルで、そこに住む方たちが喜んでくださる取り組みができた、そのことがとてもうれしかったです。「今度はいつするの?」「またしてな」という言葉をたくさんいただきました。このつながりを大事にして、これからもこの活動を続けていきたいと思えます。

そして、質の良い演劇を上演できるよう努力し、地域の方との繋がりを深め愛される場づくりを模索していきたいと強く思っています。

【参照資料】

オグシマ企画 / Facebook

